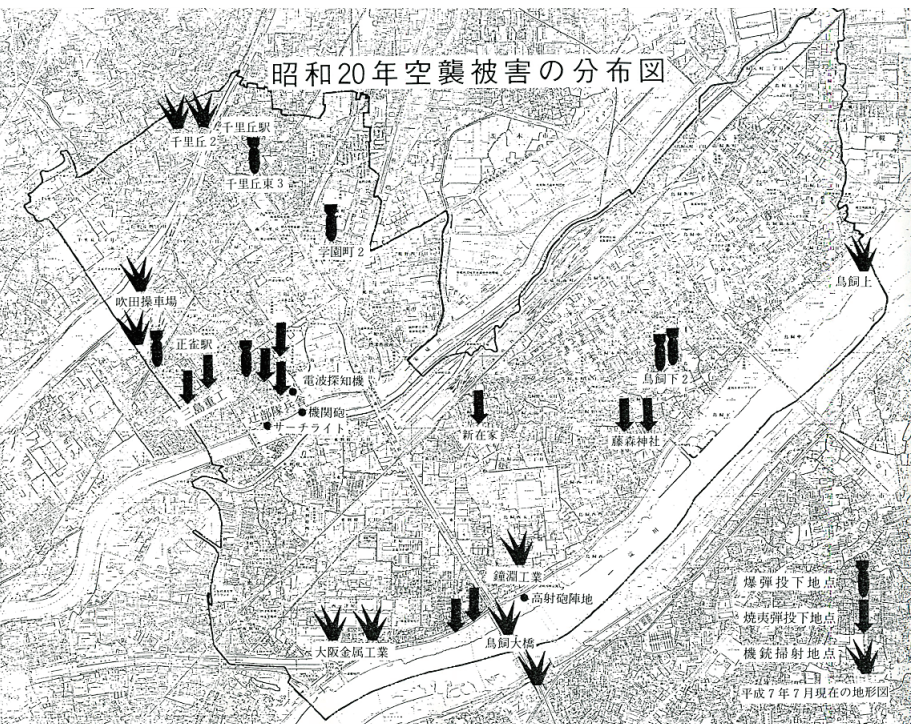
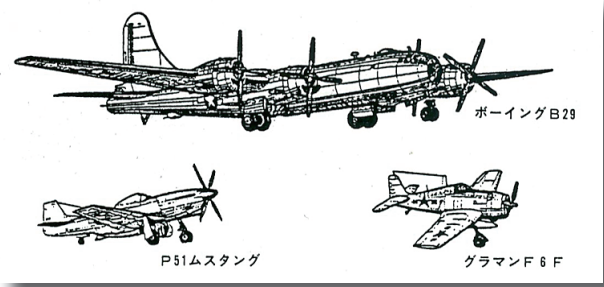


# 摂津市にあった空襲被害



▲空襲被害の分布図（昭和20年）



▲摂津市を襲った爆撃機・戦闘機



▶大阪市や北摂方面にまかれた空襲を予告するビラ（伝単）  
B29などが上空から散布。軍事施設に近寄らないよう警告と、戦争終結まで軍事施設を爆撃することが書かれています。

## 空襲の記録（昭和20年）

### ★3月19日

グラマンF6Fなどが鳥飼下2丁目に爆弾を7発投下。水田に大きな陥没を残す。

### ★6月7日

味生村にP51が飛来し、淀川河川敷・鳥飼大橋に機銃掃射。また、B29が焼夷弾を投下し、一津屋や新在家に被害発生。鳥飼村では、P51が工場に機銃掃射、B29が藤森神社付近の家に焼夷弾を投下。味舌村では、正雀本町2丁目にあった工場が焼夷弾で炎上、正雀2～4丁目の各所・味舌天満宮周辺にも多数の焼夷弾と一部に小型爆弾が投下。

### ★7月9日

P51が鳥飼上の淀川河川敷に侵入し、休閒地を耕作していた児童を翻弄した後、現在の三宅柳田小学校付近の水田・千里丘東3丁目にロケット弾を投下。また、千里丘2丁目方面に機銃掃射。この時、工場では死者・負傷者が数名発生。

### ★8月1日

国鉄吹田操車場や正雀方面でP51が機銃掃射。また、小型爆弾の投下で負傷者発生。

※以上に加え、市域は大阪市に近接しているため、府内で約50回実施された空襲の余波を被った。

昭和20（1945）年、太平洋戦争が激化する中、摂津市も空襲の被害を受けました。市内には軍需工場に指定された大規模な工場があり、千里丘駅から鳥飼大橋まで通じる防空道路（4ページ）が建設されてきました。  
B29爆撃機による爆弾投下や、P51・グラマン戦闘機による機銃掃射が住民を襲いました。（写真は市民図書館所蔵、資料出典「摂津市史別巻」）



▲召集令状が来て軍隊に入る青年を送る（昭和15年・千里丘駅）



▲千里丘駅と鳥飼大橋を結ぶ防空道路（昭和30年代初めごろの撮影）

日本が戦争をしていた時、摂津市にも空襲がありました。戦地に立ち、命を落とした市民もいました。  
今号では、戦時から摂津市に暮らし、当時のことを知る人たちに話を伺いました。消えることのない戦争の記憶は、一度戦争が起これば、どんな小さなまちでも巻き込まれる可能性があるのだと教えてくれます。  
今なお、世界の各地で紛争やテロが続発し、核兵器の脅威も消えることはありません。終戦から72年経ち、戦争を知る人が少なくなる今、その記憶を後世に語り継いでいくことが、平和な未来を築くためにできる一歩です。  
一人ひとりの幸せやまちの繁栄は、平和の上に成り立っています。戦争がいつまでも「記憶」であり続けるよう、平和宣言都市・摂津市から平和の輪を広げていきたいと思っています。

# 戦争の記憶を 忘れない



# 市民が見た戦争

摂津市で生まれ育った人たちから、戦争体験を伺いました。日々の暮らしの中にあつた戦争。そこで見たもの、感じたことを伝えます。

## 出征前夜に食べた 母の「ぜんざい」

「ぜんざい」に託された思い

戦争が激しさを増した昭和19年、二十歳になった私に軍の召集令状である赤紙が届きました。「来るものが来たか」という感覚でした。それは、当時、国のために戦争へ行くことが当たり前だったからです。

摂津市を離れる前日の晩、私が小さい頃から好きだった「ぜんざい」を母が作ってくれました。食べ物がなく、配給で賄っている中、工面して作ってくれたものでした。母は、「お国のために頑張ってください」と言いながらも、「息子を戦地へ行かせたくない



橋本秋作さん  
(91歳・正雀本町)

い、死なないでほしい」という気持ちを「ぜんざい」に託していたのだと思います。

### 出征の朝の寂しげ

出征する日の朝が来ました。軍服に身を包み、玄関を出ると、私の門出を祝う近所の人たちであふれていました。皆、国旗を手に、「元気でなあ」「頑張ってください」と声をかけてくれました。その中には、見かけない人もいました。自分のために、これだけ大勢の人が集まってくれたことにうれしさを感じる半面、これで家の敷居をまたぐことは最後だろうと寂しくも思いました。

「行ってきます」という私の言葉に、涙をこらえ笑顔をつくろうとする母の表情が、今でも忘れられません。

### 死ぬことが当たり前だった

大阪8連隊に所属が決まり、兵庫県や九州など場所を点々と変えながら、戦地へ行くための訓練を受けました。訓練は敵・味方に分かれて模擬戦闘を行うもので、銃の先に剣をつけた銃剣突撃を繰り返し練習しました。

先輩が一人、また一人と戦地へ行くようになり、少しずつ自分にも死が近づいてくることが実感するようになりました。入隊時は、弾が当たったらどんな感じなのかと恐怖を覚えたのですが、命をささげることが生きる道、国のために死ぬことが当たり前なのだ、戦地へ行き亡くなった先輩たちを思ううちに、死への恐怖や不安は薄れていきました。

### 身近な人と築く平和

昭和20年8月15日、日本は終戦を迎え

ました。戦地へ行き死ぬものと考えていた私は、これからどう生きていこうか途方に暮れました。自分の命を考えてもいい、そんな日が来るとは思っていませんでした。

故郷に帰ってきた日の晩、母は何も言わずに「ぜんざい」を作ってくれました。帰ってきたことを実感した瞬間でした。立派に

働いて親孝行しようと、生きる目的が生まれました。

戦後、地元で教師になり定年まで働きました。生きて働くことへの感謝、素晴らしい生徒たちとの出会い、それが私を支え続けました。日本が戦争をしていた当時、生きるためには相手に勝つこと、それが全

てでした。しかし、相手を倒し屈服させることで平和は訪れません。今、家庭での暴力や虐待など痛ましい話をよく聞きますが、平和は相手を尊重すること、命を大切にすることから始まると思います。家族や隣近所と仲良くすることが、平和なまちを築くことにつながるのではないのでしょうか。

で縮こまる真っ黒な死体を目にしました。それはおぞましい光景でした。

### 痩せ細り故郷へ

「大きな爆弾が落とされて、日本が負けたりしい」と一晩の帰郷を許された友達が隊へ戻り話をしました。原子爆弾の投下です。上官の「天皇陛下から大事なお話がある」との声に、完全武装で整列しながらラジオから流れる玉音放送を聞きました。難しい言葉の意味は分かりませんでしたが、友達の話と雰囲気から、日本が負けたことを理解しました。「やっと故郷に帰れる」最初にわき起こった素直な気持ちでした。帰ってきた私を、母は最初、息子と認識できませんでした。色白だった私は真っ黒に焼け、20キロも痩せ細っていたからです。

さつまいもの蔓まで食べていた当時、本当にひもじい思いをしました。お米一粒でも残さず食べていたものです。平和で、お腹いっぱい食べられることのありがたさを、今の人に感じてほしいと思います。

## 別れの杯を交わし 前線部隊へ

友と交わす最後の杯

小・中学生の頃、ラッパを吹くのが大好きでした。進軍ラッパを吹きながら戦地へ行く兵隊を千里丘駅や正雀駅まで送ったことがあります。昭和20年、19歳になった私は千里丘駅に立っていました。軍の召集令状が来た私は見送られる側となったのです。

出征前夜、まともな食べ物がない時代に、貴重なお酒を手にした友達が家に集まって来ました。「ついに順番がまわってきたな」と話す友達。杯を交わすうち、戦地へ行け



北本清三さん  
(91歳・千里丘東)

ば生きて帰ることはない、これが友達との別れなのだ、何とも言えない物悲しさを感じました。

### 黒いげの死体

私は、和歌山県沿岸にある雑賀崎に配属されました。敵の日本上陸を阻む前線部隊です。ダイナマイトで岩に穴を開け、大砲を入れる陣地を作っていました。その時、空を覆うばかりのB29爆撃機が飛来し、市街地に焼夷弾の雨を降らせました。真っ赤な色で映し出される和歌山城、苦悶の表情

# 子どもの私に銃撃 刻まれた兵の顔

## 戦争で変わる学校

私が小学校に入学する昭和16年4月、学校の教育が、お国のために立派な兵隊になることを強く意識したものに変わりました。尋常高等小学校から国民学校へと名称が変わり、両親が買ってくれていた制服や帽子、ランドセルは使えなくなりました。代わりに国から深緑の制服、肩掛けカバンなどを指定されました。大きな変化の中、私の小学校生活が始まりました。

国語の教科書はすべて暗唱させられました。兵隊が戦地で活躍する話「進め、進め、兵隊進め」を学校の帰り道、友達と声に出して歩いたことを思い出します。

## 村中で祝う戦果

入学した年の12月8日、全校生徒が集まる朝礼で、校長先生から「今日から日本は連合軍と戦争を行うことになった。君たちはお国のためにしっかり勉強してほしい」と伝えられました。日本とアメリカの戦争



寺西正温さん  
(82歳・一津屋)

が始まった真珠湾攻撃の日でした。「ついに大きな戦争が迫ってきたか」と子どもながらに強く感じました。

毎日、ラジオから、日本の戦果を伝える「大本営の発表」がありました。大きな戦果を上げた時などは、村長の号令のもと、口伝いに集まった大勢の村人が国旗を手に「万歳」「勝った」と大声を上げ、村中を練り歩きました。大人たちが喜ぶ様子や戦争に勝ったことがうれしく、私も友達と一緒に大人の輪の中に混じってお祭りのようにはしゃぎました。

## 子どもでも狙われる

小学4～5年生の頃、学校では、竹槍で敵を倒す訓練が行われたり、校庭に防空壕を掘ったり、まともな勉強をする時間はほとんどありませんでした。ラジオでは、連日のように日本が戦争に勝っている様子が伝えられていましたが、人づてに、「日本に爆弾が落ちてくるぞ」といった恐ろしい情報も入ってくるようになりました。空襲の

爆風が防空壕入口の戸を大きく揺らししました。外はどうなっているのか、それほど気になりました。30分程で音が止み、外へ出て淀川の土手下へと避難した友達に話を聞くと、たくさん爆弾が空から降ってきたが、全て淀川に落ち、工場は無事だった

とのことでした。電信柱より高い水柱が何本も上がり恐ろしい光景だったようです。奇跡的に一人の死者も出ませんでした。小学1年生の時に始まった太平洋戦争は、5年生の時に終わりました。70年以上経った今でも、あの時の記憶は忘れることがで

# 通学中の空襲警報 恐怖を感じた日々

## 戦地へ行った父 信じ続けた母

私が小学2年生の時、父に軍の召集令状である赤紙が届きました。当時、戦地へ行くことが当たり前だったので、「父も戦争に行くんだな」といった自然な感覚でした。

母は毎日、近所の須佐之男神神社へ行き、父の無事を祈り続けていました。ある日、母に連れられ、兵庫県で戦地へいく訓練を受けている父に面会に行きました。兵舎を囲む高い壁の上から顔を出す父に話しかけるのが面会でした。父が「娘に風邪を引かせないように、大切に育ててほしい」と一



西尾明子さん  
(83歳・千里丘)

人娘の私を気遣う言葉を母に伝えていたことを覚えています。

終戦から2年後、父は戦地ビルマから帰ってきました。生きていることを信じ続けていた母の気持ちはいかばかりだったかと思えます。

## 田に突き刺さった焼夷弾

小学4～5年生の時、学校では「なぎなた」の訓練や小さな旗を上下左右に振り信号を送る「手旗訓練」を行っていました。学校は勉強の場ではなくなっていたのです。この頃、空襲の危険を知らせるサイレン

危険を知らせるサイレンが学校や工場から鳴り響くようになるのもこの頃です。学校には空襲から身を守る防空頭巾を必ず持つていくようになりました。

学校帰りのある日、戦闘機が6～7機、列を作って飛んでいるのを見ました。そのうちの1機が突如急降下してきたかと思うやいなや、機関銃を打ってきたのです。慌てて川に飛び込み難を逃れましたが、銃を撃つ兵士の顔が今でも脳裏に焼き付いています。その後も戦闘機が飛んでいるところを度々見かけました。敵は子どもでも容赦なく狙ってくるのです。実際に私の友達も犠牲になりました。戦争は、大人も子どもも関係なくみんながやられるのです。

## 軍需工場を襲った空襲

当時、私の住む一津屋にある大阪金属工業（ダイキン工業）は、国の軍需工場に指定されていました。軍需工場は敵の標的にされやすかったのですが、不思議と大きな空襲はありませんでした。しかし、終戦一月前の7月に、その工場を目がけて爆弾が落とされるうわさを聞いたのです。大きな工場に爆弾が落とされることになれば、私の住む地域はひとたまりもありません。そしてその日は本当にやってきました。

午後2時ごろ、空襲警報が鳴り、私は家の庭の防空壕へ祖母と避難しました。警戒した村人の多くは、工場から離れ、淀川の土手近くへと布団や毛布を持って避難しました。爆弾の落とされる音が遠くで聞こえ、

きません。私たちの住む摂津市にも戦争があったこと、自分が体験したことを語り継いでいきたいと思っています。写真や資料からでは実感できない生の声を伝えたいのです。

が鳴るようになり、通学中、恐怖を感じながら家に引き返したことが何度もありました。母と家にいた日の昼、サイレンも鳴っていないのに、戦闘機が近づいてくる音を耳にしました。一瞬の出来事で、身動きする間もなく爆弾が落ちる音がしたのです。しばらくして恐る恐る外へ出ると、家の裏の田んぼには、たくさん鉄の筒が突き刺さっていました。その爆弾は焼夷弾で、投下後、油がつまった鉄の筒が広範囲に飛び散り周囲を延焼させる恐ろしい爆弾でした。

## 戦争は二度とない

昭和20年8月15日、学校の運動場に全校生徒が集められ、ラジオから流れる玉音放送で戦争が終わったことを知りました。それは昨日までが嘘のように突然聞かされました。「あの怖かった戦闘機も来なくなる」「命が助かった」と心底ほっとしたことを覚えています。

戦争は二度とご免です。今、戦争が起こったら、真っ先に思うのは孫が兵隊にとられていく姿です。それだけは絶対に嫌です。



# 摂津市の平和への取り組み

摂津市は昭和 58（1983）年に、「憲法を守り人間を尊重する平和都市宣言」を行いました。宣言の精神をふまえ、摂津市から平和の輪が広がっていくことを願うとともに、平和について考える機会をつくらうと、市では毎年7・8月を平和月間と定め、戦争の悲惨さや平和の尊さを訴えています。

摂津市の平和への歩みを紹介します。



▲市役所庁舎前の「平和をよぶ手」像

## 憲法を守り人間を尊重する平和都市宣言（全文）

私たちは、憲法で戦争を放棄し、世界の恒久平和の実現に貢献することを誓っています。

しかしながら、世界各地では武力紛争が絶えず、とりわけ核兵器は、人類のみならず生命の宿るすべての生存を脅かし地球環境を破壊するものであり、核兵器の廃絶が強く求められています。

国際社会の新たな秩序と安定が求められている今日、国籍や民族、宗教の違いを認め合い、平和のうちに生存する権利並びに人間としての尊厳および幸福追求の権利が尊重されることが全人類の切実な願いになっています。

ここに、摂津市は国内外の平和を愛する人たちとともに非核・平和を訴え、この地球から核兵器をなくし、人間とともに生きる喜びがあふれる社会の実現に積極的に取り組むことを決意し、憲法を守り人間を尊重する平和都市になることを宣言します。

昭和 58 年 3 月 30 日  
（平成 11 年 4 月 1 日改正）

### 全国初の宣言と平和のシンボル

摂津市の平和都市宣言は、「憲法を守り人間を尊重する」という言葉が加えられています。こうした護憲・平和都市宣言は、全国初の宣言でした（全文は右記）。市は、国際社会の一員として非核・平和を訴え、人間としてともに生きる喜びがあふれる社会の実現を目指しています。



### ▶シンボルマーク

宣言を行った

### 日本最大級のカリヨン 平和の尊さを伝える公園

同代表には、市内公共施設で市民の皆さんに折っていただいた鶴を託し、平和への願いを届けています。

国連の国際平和年である昭和 61 年、市制施行 20 周年を記念して、学園町に「平和公園」が完成しました。同公園には、カリヨンのアーチや被爆石があります。



▶平和公園 カリヨンと折る子の像

### 広島・長崎へ 市民の願いを届ける

市では毎年 8 月に、市内公共施設

昭和 58 年には、平和宣言都市にふさわしい標語とシンボルマークを市民から公募。選ばれたシンボルマークには、平和の鐘の響きの中、大きく飛躍しようとする摂津を見守る鳩に「だれもが幸せに」との願いが込められています。標語は、「平和の輪 大きくはばたけ 摂津から」が選ばれました。また、平和都市宣言のシンボルとなる記念碑「平和をよぶ手」像（右上）を市役所庁舎前に設置しました。



▶折り鶴コーナー

昭和 60 年から、広島市（平成 21 年からは長崎市と交互）で「原爆の日」に行われる「平和記念式典」に摂津市の市民代表を派遣してま

内では最大規模です。アーチの両側には、和文と英文の平和都市宣言文が刻まれており、季節に合わせたメロディーが、朝 8 時・正午・夕方 5 時に流れます。

被爆石は、広島市から譲り受けたもので、原爆で被爆した旧広島市庁舎の階段の石と間知石（けんちいし）です。当時の荒木武広島市長からの



「この石が、核兵器の廃絶と世界の恒久平和の実現という広島の実現を訴える生き証人として、摂津市民のみなさんとともに生き続けることを願っています」と

### 全小学校で平和学習

市内全小学校の 6 年生は、毎年、修学旅行で広島に行き、平和について学習しています。事前に原爆ドームや資料館、平和に関する史跡などを調べ、調べたことを現地で深めています。ここで見聞きたり学んだりしたことを、12 月 8 日を中心に各校で行われる平和集会で下級生に向けて発表しており、摂津市の小学校の特色の一つとなっています。

## 8月の平和月間イベント

公共施設では、平和に関する取り組みを実施しています。ぜひご参加ください。

◆平和図書コーナー 平和に関する本や絵本の展示

とき 8 月 31 日(木)まで

ところ 市民図書館、鳥飼図書センター

◆パネル展 広島や海外の子どもが描いた平和ポスターの展示

とき=ところ 8 月 7 日(月)まで=コミュニティプラザ・エントランスホール

◆平和黙祷

8 月 9 日(水)午前 9 時 15 分に 1 分間の黙祷を公共施設で行います。ご家庭・地域でも黙祷を捧げていただきますようお願いいたします。

戦争体験集「平和」配布

戦後 40 年の節目となる昭和 60 年に発行された、戦争体験集「平和」を配布しています。希望者は人権女性政策課までご連絡ください。